

## 英語教育で育む人間性とは何か —新時代で求められる能力を考える—

The Purpose of Character Education Through English Education:  
— The Competence Needed for the Global Era —

奥羽充規  
Atsunori OKUBA

### SUMMARY

It is the intention of the author to explore and discuss what character education through English Education is. The study focuses on (1) to introduce the concept and definition of character education, referring to why we need the kind of character education we have at present; (2) to review the new Course of Study, in which we can find the description of “Power to learn, character etc.” and discuss content concerned with CEFR; and (3) to offer a suggestion about how we should deal with character education when teaching English using the CLIL method under MIT (Multiple Intelligences Theory).

### はじめに

教育という分野に新しい風が吹いている。平成29年度告示の学習指導要領において、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築していくことができるようにすることが求められている。」と述べられており、かつてないグローバル化および技術革新の時代において要求される教育の幅広さを物語る。

ファデル, C.・ピアリック, M. 他 (2016) は「古代より教育の目標は学習者として成功し、コミュニティに貢献し、倫理観のある市民として社会に奉仕する、自信と思いやりに満ちたことを育てることにあつた」と言及する。教育基本法においても(教育の目的)第1条において「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた(中略)国民の育成を期して行わなければならない」と示されているが、これからの教育に新たに求められるものはまさに、知識や技能を超えた人間性に関わるものである。(下線部は筆者による。)

村野井 (2018) は「英語教育の目的が人格の完成をめざすことと共生社会に貢献できる人を育てることだとすれば、英語教育において育てるべきものが単に英語力だけでは不十分ということになる」と言及するが、それは当然至るべき結論である。しかしながら、そのことに関する研究は特に人格や人間性といった分野においてこれまでほとんどなされていない。

本論においては、英語教育を通して行う人間性教育とはどのようなものかについて議論する。第1章においては、まず人間性教育とは何かについて、その定義と教育の目的について説明し、なぜ人間性教育が今必要とされるのか言及していく。第2章においては、平成29年度告示の新学習指導要領における人間性教育についての言及を紹介し、「学びに向かう力、人間性等」の扱いについて言及するとともに、その「内容」やCEFRとの関わりについて議論したい。そして、第3章では英語教育における人間性教育の在り方について、MI理論およびCLILとの関係性等に触れながらその可能性と課題について議論する。

## 1. 人間性教育とは

### 1.1 人間性教育の定義と目的

ファデル, C.・ピアリック, M. 他 (2016) は人間性教育 (character education) を次のように定義する。

豊かな人生と社会の繁栄のために賢明な選択ができる徳 (資質) や価値観 (信念と理念)、そして能力を身につけさせ、伸ばすことである。<sup>1)</sup>

また、同氏らはその目的として次の3つがあると主張する。

1. 生涯学習の基礎をつくることができる。
2. 家庭、コミュニティ、職場における良好な人間関係をサポートすることができる。
3. グローバル化した世界への持続可能な参加のための価値感と徳を育成することができる。

ここでは、個人の人生のための人間性に加え、協働的に他者と関わるすることができる人間性や、より広い世界との共生を可能にする価値観などを身につけることがその目的としてあがっている。

一方、ガードナー (2008) は、予想が難しく変化に富んだ未来に対して臨むべき心 (知能や態度) の教育の必要性を説き、人間性としての5つの心を身につけることが知的な未来を創るために必要な要素であると主張する。彼もまた、「現行の教育方法が実際のところ機能していない」という事情や「世界の状況が大きく変化していること」に対処するためには新たな教育の道を探る必要があると説いている。

### 1.2 「人間性」とは何か

ガードナー (2008) では以下のような5つの心を身につけるべき「人間性」の要素として言及する。

---

1) ファデル, C.・ピアリック, M.・トリリング, B. 『21世紀の学習者と教育の4つの次元』 p.113より

1. 熟練した心 (Disciplined Mind)
2. 統合する心 (Synthesizing Mind)
3. 創造する心 (Creating Mind)
4. 尊敬する心 (Respectful Mind)
5. 倫理的な心 (Ethical Mind)

これらのガードナーによる5つの心といった「人間性」の要素は、予想不可能な新時代に生き残るための「人間性」の在り方としての性質が強いものである。したがって、汎用性という点においては、以下に紹介するファデル, C・ビアリック, M. 他 (2016) による「人間性」特徴を参考にしたい。

ファデル, C・ビアリック, M. 他 (2016) によると、人間性特徴とは、練習することで獲得し、磨くことができるものであり、そうあるべきものである。そして、それ故に教育目標の枠組みとして不可欠な要素としている。これまで人間性の特徴を教育するような包括的な枠組みは存在しなかったこともあり、ファデル氏らは世界中の多くの枠組みを統合・精選を実施したのである。

表1にファデル, C・ビアリック, M. 他 (2016) が挙げる人間性の特徴として主要な6つの特徴を紹介する。また、その特徴と合わせて関連する概念についての項目をさらにリストにしている。このような人間性の特徴は、彼らのとらえ方によると、知っていることをうまく使う力である「スキル」ではない。人間性特徴は「この世界でどのようにふるまい、世界とどのように関わるかに関すること」と言及されており、より普遍的な次元なものと認識されている。

表1 主要な人間性の特徴<sup>2)</sup>

主要な人間性の特徴	関連する人間性の特徴と概念 (網羅的ではない)
マインドフルネス	自己覚知 (自分への気づき)、自己実現、観察、内省、意識、思いやり、感謝、共感、成長、ビジョン、洞察、平静、幸福、威風、真正、傾倒、共有、相互連結、相互依存、統一性、受容、美、感受性、忍耐、平穩、均衡、靈性、実存、社会意識、異文化への意識など
好奇心	開かれた心、探求心、情熱、自己主導性、意欲、主導性、革新性、熱中、驚嘆、審美、自発性など
勇気	勇敢、決断、不屈の精神、自信、リスクを恐れない、粘り強さ、強靭さ、熱情、樂觀性、ひらめき、気力、活力、熱中、快活さ、ユーモアなど
レジリエンス	辛抱強さ、気概、粘り強さ、機知に富む、元気、自己鍛錬、努力、勤勉、傾倒、自制心、自尊感情、自信、安定性、適応力、曖昧さへの対応、柔軟性、フィードバックなど
倫理	慈悲、人間味、高潔、敬意、正義、平等、公平、思いやり、親切、利他性、開放的、寛容、受容、忠誠、正直、真正、偽りのなさ、信頼、礼儀正しさ、配慮、救し、徳、愛、ケア、助力、寛大、博愛、献身、相互信頼など
リーダーシップ	責任感、自制、説明責任、頼もしさ、信頼感、実直さ、忘己利他、謙遜、節度、自己省察、創造性、組織力、代表、助言、傾倒、英雄的資質、カリスマ性、フォロワーシップ、関与、手本を示して導く、目標志向性、焦点性、結果志向性、正確さ、実行力、効率性、交渉力、一貫性、社交、多様性、品位など

2) 下線部は著者が作成。学習指導要領の例示と重なるものを提示。

### 1. 3 なぜ人間性教育なのか

ガードナー（2008）によると、「いま創造性がとくに必要とされるのは、人間的な領域（とりわけ、他者とのかかわり方、仕事のしかた、市民としての義務の果たし方）だ」とある。Trilling, B., & Fadel, C.（2009）のような21世紀スキル<sup>3)</sup>は確かに人工知能（AI）が飛躍的に発達し、グローバル化の進展により社会構造や雇用環境が大きく変わる予測困難な時代においても必要な「スキル」であろうが、同時に重要なのはそれら「スキル」を活用する心の働きであろう。そして、その心の働きと知性（知性については第3章で言及する）とを養うことが必要であるとしている。

ファデル, C・ビアリック, M.他（2016）は人間性特徴は「さらなる学びや生産的な職業・キャリア、市民としての義務への積極的な関与などについて、子どもたちがそれをどれだけうまくやれるかをスキル以上によく予測するだろう」と主張し、人間性教育の将来性に言及している。実際、昨今注目を浴びている教育分野の1つであるリメディアル教育においても、単なる学力の補充という視点よりも、むしろ自尊心や自己効力感などといった学生の人間性や心に関する教育的補完という視点の研究が多くなされている。<sup>4)</sup>もはや、知識や技能を身につけるだけの教育だけでは新しい時代を生き抜くことが困難になってきていると言えよう。

## 2. 新学習指導要領における人間性教育

### 2. 1 外国語・外国語活動で育成する資質・能力

学習指導要領はおよそ10年ごとに改定されていることは周知の事実であるが、その改訂にはやはりその時代ごとの課題を解決するための方策が述べられている。本多（2018）が言及するように、従来は「何を教えるか」が主に示されてきたが、新学習指導要領においては「何ができるようにするのか」、「どのように学ぶか」まで示されるようになった。また、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が以下の3つの柱に整理された点が大きな特徴の1つであると言える。

- ① 「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ② 「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成）」
- ③ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

また、村野井（2018）は学習指導要領が示す、小学校・中学校・高等学校の外国語活動又は外国語で育成を目指す資質・能力を以下のようにまとめている。

---

3) 創造性、批判的思考、コミュニケーション、協働の4つのCを指す

4) 牧野（2013）や清田（2010）より

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
<ul style="list-style-type: none"> <li>●外国語の特徴やきまりに関する理解・音声、語彙・表現、文法の知識</li> <li>●言語の働き、役割に関する理解</li> <li>●外国語の音声、語彙・表現、文法の知識を実際のコミュニケーションにおいて運用する技能など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●外国語で、情報や考えなどを表現し伝え合う力</li> <li>●コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じたコミュニケーション力</li> <li>●考えの形成、整理</li> <li>●知識や得た情報を活用して、自分の意見や考えを外国語で形成・整理・再構築する力および表現する力など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●外国語を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度</li> <li>●他者を尊重し、相手に配慮しながら理解したことを活用して表現しようとする態度</li> <li>●積極的に人や社会と関わり、自己を表現するとともに互いの存在について理解を深め尊重しようとする態度など</li> </ul>

図1 外国語活動・外国語科において育成を目指す資質・能力<sup>5)</sup>

新学習指導要領では、各教科等の目標に「見方・考え方」が位置付けられている。そして、外国語・外国語活動における見方・考え方は「外国語で表現し合うため、外国語やその背景にある文化、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と説明される。この見方・考え方はいわゆる各教科の思考の枠組みであり、先ほどあげた3つの柱の前提となる、村野井の言及するところの「深い学びの鍵」となるべきものである。加えて、村野井は外国語を使った異文化間コミュニケーションに求められるのは、他者が持つ価値観、宗教、考え方、生き方などの文化を認める「寛容さ」(tolerance)であり、心のしなやかさであると主張しており、図1であげられる「学びに向かう力・人間性等」を端的に表す人間性的資質であろう。

## 2.2 「学びに向かう力・人間性等」で育成すべき内容とは

次に、先ほどあげた3つの柱として育成を目指す資質・能力を育成する内容や方法について言及する。3つの柱の内、「知識・技能」および「思考力・判断力・表現力等」に関しては、「何を理解しているか、何ができるか」や「理解していること・できることをどう使うか」という視点で、外国語の学習における「技能」および「知識」、そして具体的に実施する活動方法や場面設定などの「内容」が学習指導要領にて提示されている。したがって、その方法論についても具体的指導例は想像しやすく、従来の指導法を中心に指導することが可能である。では、「学びに向かう力・人間性等」に関してはどうか。松沢・三浦等(2018)は小中高の新学習指導要領は「学びに向かう力、人間性等」について、その「目標」は示されているが、その「内容」は示されていないと指摘する。確かに、保健体育などの他教科においてはそれが示されている一方で、「外国語」においては示されていないのである。

そこで、松沢・三浦等(2018)は「学びに向かう力、人間性等」の「内容」を明確に構想する必要性を訴え、一案を作成している。そして、先ずその前提として、「教科や体験活動等を通して育む「学びに向かう力、人間性等」は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」をどの方向に働かせるかを決定する情意や態度等に関わる「学力」である」と主張する。加え

5) 村野井(2018)『小学校の英語教育の基礎知識』p.23より

て、学びに向かう力は「メタ認知」であり、人間性等に関しては「社会の中でどのように関わっていか」、「思いやり」、「興味・関心」、「勇気」、「逆境を跳ね返す力」、「倫理観」、「リーダーシップ」といった「教育課程企画特別部会」（2015）の資料による人間性の中身を構想案として引き出しているが、その妥当性についての議論はなされていない。

次に中学校新学習指導要領解説の総則編から、「学びに向かう力、人間性等」に関わる情意や態度についての例示を紹介する。<sup>6)</sup>

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力
- ・自己の感情や行動を統制する力
- ・よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等
- ・自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力
- ・多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力
- ・持続可能な社会づくりに向けた態度
- ・リーダーシップやチームワーク
- ・感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するもの

これらの例示と表1のファデル, C.・ピアリック, M.他（2016）が作りあげた人間性の6つの特徴と重複している範囲は、5つの人間性特徴（マインドフルネス、好奇心、レジリエンス、倫理、リーダーシップ）の中の30項目に及ぶ。（表1の下線部を参照）もちろん、これの比較対象が「外国語」に関する資質としての「学びに向かう力、人間性等」であれば、多少の変化はみられる。

そして、筆者が中学校学習指導要領解説外国語編（p.15）の「学びに向かう力、人間性等」に関する目標の文言を6つの人間性特徴から検討していくと、以下のような結果になった。（表2）

このような人間性の特徴は学習指導要領の説明で使用されたことばをもとに選んでいる。したがって、その選別には多少の誤差があることも踏まえた上で、身につけるべき人間性の特徴としてその具体的概念と合わせて引き出してみると、今後の方針が見えてくるのではなかろうか。そして、それでこそ「学力」としての人間性等が評価対象になると私は考える。

表2 「外国語」（中学校）で求められる人間性特徴

主要な人間性の特徴	関連する人間性の特徴と概念（網羅的ではない）
マインドフルネス	自己覚知（自分への気づき）、異文化への意識
好奇心	意欲、自発性
勇気	自信
レジリエンス	自信、柔軟性、
倫理	寛容、受容、配慮、相互信頼
リーダーシップ	目標志向性、実行力、交渉力、社交、多様性、

6) 平成 29 年度 中学校学習指導要領解説 p.39 より



## 2.3 CEFRのねらいと人間性教育

日本の外国語教育において、その目標を考える上で特に大きな影響を与えているのはやはりCEFRである。外国語教育の国際的な基準である「ヨーロッパ共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages, CEFR）」は、拝田（2017）が言及しているように、新学習指導要領において随所にその影響が見て取れる。

新中学校学習指導要領によると、その改訂の要点として、「外国語学習の特性を踏まえて「知識と技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成するとともに、その過程を通して、「学びに向かう力、人間性等」に示す資質・能力を育成し」、そこに至る段階としてCEFRを参考に「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」[やり取り]、話すこと[発表]、「書くこと」の五つの領域を英語の目標としている。

CEFRでは、「やり取り」は「言語使用と言語学習の中でも大きな重要性が認められていることから、コミュニケーションにおける中枢的役割を果たしている」とあり、人間が言語を用いて行うタスクをreception（受容）、interaction（やり取り）、production（産出）の3領域に分けている。そして、それらが総合的に「コミュニケーション活動（Communication Activities）」と呼ばれている。したがって、上記の五領域もまた、受容からやり取り、そして産出の順に明記されているのであろう。そして、先ほどの「やり取り」を重視する考え方は、外国語で行われるコミュニケーション能力の重要性を特に表しているものである。

また、村野井（2018）はCEFRにおける外国語教育の基本的な考えは「異なる言語のアイデンティティの発達を促すことにある」と言及し、加えて「多言語・多文化社会であるヨーロッパにおいて相互交流、相互理解、そして相互協力を促し、偏見や差別を乗り越えるためには外国語の力が必須である」とそのねらいを説明する。そして、その中心的な考え方である「複言語主義」や「複文化主義」に触れ、一人の人間が自分の中に母語とは異なる言語、自文化とは異なる文化を取り入れ、多角的で柔軟な物の見方ができるようになることを目指す個人が集まる社会は、「寛容で多様性を尊重する社会になるという願いがCEFRに込められている」と締めくくる。

上記にある「相互交流、相互理解、相互協力」を図ることができ、「寛容で、多様性を尊重する」人間性を身につけることがCEFRのねらいとするならば、おのずと日本の英語教育の目的もまた、それにならうのも必然であろう。

## 3. 英語教育を通じた人間性教育の可能性

### 3.1 MI育成と人間性教育

ガードナー（2003）は、人間には多様な知能が存在し、それら多元的な知能が複合的に働き、補完し合っているといた考えを主張する。ガードナーはこのような人の知性（知能）を多元的にとらえる考え方を多重知能理論（Multiple Intelligences Theory = MIT）として紹介し、人間の知能を①言語的知能、②論理・数学的知能、③視覚・空間的知能、④身体運動的知能、⑤音楽的知能、⑥対人的知能、⑦内省的知能、⑧博物的知能の8つに分類し、定義している。ガードナー（2001）では知能を「ある文化において価値があるとみなされている問題を解決したり、

価値があるとされるものを創造する能力」と定義し、上記の8つの独立した知能の組み合わせを認識し、育てることが究極的に重要であると主張し、そうすることによって世界で我々人間が直面する多くの問題を解決できると述べる。

二五（2016）もまたこの言及を特に重要な点としてとらえ、個々の人間が持ち合わせる多様な知能の組み合わせを認識し活用することの重要性を主張する一方で、和泉（2016）は「知能同士が補う中で人は自分の可能性を引き出していけると考えられる」と言及する。

また、ここで紹介しているガードナーの「知能」という概念であるが、先ほどのガードナー（2001）にあるように、それは「価値があるとされるものを創造する能力」なのであり、いわゆるIQのような一方方向にのみ方向づけられた知能を意味していない。「知能」と表現しているが、ガードナー（2008）では「広い意味では心、それも学校や職場で訓練できる類の心としてとらえるほうがよい。」と言及している。そして、そのような考え方は松沢・三浦等（2018）の主張する教科や体験活動等を通して育む「学力」に極めて近いものであろう。

さらに、ガードナー（2003）は Multiple Intelligences の効用をコミュニティ形成の点から次のように言及している。

If we can mobilize the spectrum of human abilities, not only will people feel better about themselves and more competent; it is even possible that they will also feel more engaged and better able to join the rest of the world community in working for the broader good. Perhaps if we can mobilize the full range of human intelligences and ally them to an ethical sense, we can help increase the likelihood of our survival on this planet, and perhaps even contribute to our thriving.<sup>7)</sup>

（人間の能力の濃淡をうまく扱うことができれば、人々は自分についてよりよい感じをもち、有能だと思っただけでなく、まわりのコミュニティをよくするために熱心になり、実現する可能性すらあるだろう。おそらく、人間の知能をすべて結集して、倫理的に結びつけることができれば、地球を永続させ、人類を繁栄させることにさえ寄与できるだろう。）<sup>8)</sup>

「人間の能力の濃淡」を、二五（2016）は強い知能と弱い知能を意味すると説明する。そして、それら強い知能と弱い知能を認識し、その上で助け合いながら社会の中で強い知能を活用していくことが、自分自身に対する前向きな気持ちを持つことにつながり、自己有能感をもつことができ、その結果として良好な人間関係をもったコミュニティ形成につながるとしているのである。また、個の中における多重知能の活用が、社会の中での集団における知能の活用へとつながれば、強い知能が弱い知能を補うことによる世界平和の実現に貢献すると二五は強調する。

すなわち、第1章でも紹介した学校教育法第1条の「平和で民主的な国家及び社会の形成者

---

7) ガードナー（1993）p.24

8) ガードナー（2003）p.21



として必要な資質」を育むことが可能であることが分かる。そして、次章では、多重知能理論を通じた英語 CLIL と人間性教育への応用の可能性について言及する。(下線部は筆者による)

### 3.2 英語 CLIL と人間性教育

二五(2016)は多重知能理論を小中学校で英語 CLIL を実践するための Scaffolding として授業設計を行った。それは、多重知能理論の実践を CLIL 実施のための方法論の展開として応用したのである。つまり、二五は小中学校の教科横断型の教育の実践的な方法論として英語 CLIL を使用し、教科ごとの授業活動の特徴を考慮に入れながら「8つの多重知能」の育成を図った。

しかしながら、これは英語 CLIL を実践するための活動を設計するためのアプローチとしての「多重知能」活用であり、「知能」の育成はどちらかと言えば結果としての副産物であろう。それでも、図2にあるような形でそれぞれの活動で育成することができる「知能」を可視化し、それを意識しながら授業を実施することは画期的であり、新たな教育のあり方として興味ぶかい。

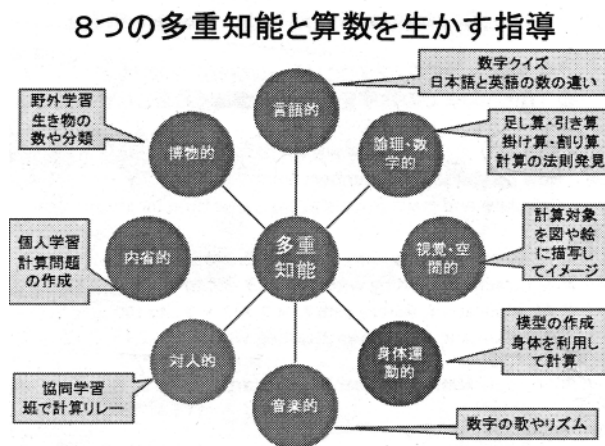


図2 8つの多重知能を生かした算数 CLIL とその指導活動<sup>9)</sup>

一方、奥羽(2018)は英語 CLIL が多重知能育成のための Scaffolding であり手段になりうると指摘する。すなわち、英語 CLIL が多重知能育成を図る効果的な教授法であると主張している。特に言語的知能や対人的知能などは外国語を通じた学習であることでその育成が効果的であると指摘している。また、上記のガードナー(2008)の言及にあるように「知能」は「心」でもある。よって、英語 CLIL を通して「多重知能」のみならず「心」すなわち「人間性」を育むことを視野に入れることも今後取り入れるべきあり方であろう。

では、ファデル, C・ビアリック, M. 他(2016)の提案した6つの主な「人間性特徴」の育成に「8つの多重知能」を照らし合わせるとどのようになるのであろうか。表3は「8つの

9) 二五(2018) 第3回英語教育セミナー資料より抜粋

知能」を引き出す教え方を二五が Armstrong (2000) よりまとめたものであるが、それを元にして筆者が表1の人間性の特徴との関連性から作成したものが、表4である。

表3では、多重知能を引き出す教育活動の方法一覧が挙げられている。活動と知能とがリンクして可視化されると、授業者は自分の授業の特徴やそこで育まれる知能を予測することができると同時に、学生の質に合わせた授業活動の設計が可能になる。

表3 8つの知能を引き出す教え方<sup>10)</sup>

知能	教え方
①言語的知能	本を読む、ブレンストーミングをする、テープレコーダーを活用する、ことばゲームをする、準備してからスピーチをする、ディベートをする、日誌を書く、文法を覚える、クラスの新聞をつくる、作文を印刷して配布する
②論理・数学的知能	情報を分類する、算数／数学の問題を解く、ソクラテス式の間答をする、理科の実験をする、タイムラインを書く、パズルやゲームをする、ものを量る／計算する、子ども自らが調査や発見を通して問題解決をする、科学的な視点を持つ
③視覚・空間的知能	学ぶ内容を視覚化する、ビデオ／スライド／映画を活用する、地図を活用する、色を多用する、絵画鑑賞をする、創造的な物語を語る、イメージマップを描く、アイデアを描く、絵やイラスト活用する、デザインソフトを活用する
④身体運動的知能	体で表現する、クラス劇を演じる、競争型ゲームと協力型ゲームをする、料理をする、つくる体験から学ぶ、算数セットなどの教具を活用する、ジェスチャーをする、ボディ・ランゲージでコミュニケーションをとる、ものに触ってみる、体を道具として使う、体育の授業をする
⑤音楽的知能	歌う・ハミングする・口笛を吹く、リズムに合わせて歌ったり体を動かしたりする、学ぶ内容を歌にする、音楽鑑賞をする、記憶力を高める音楽を聴く、CD目録をつくる、作詞・作曲をする、概念を表す音色を出してみる
⑥対人的知能	相互にやりとりをする、二人で話し合う、互いに教え合う、グループで学ぶ、ロールプレイング、グループでブレンストーミングをする、人間ブラモデルをつくる、シミュレーションをする、対立を解決する
⑦内省的知能	1分間の振り返りをする、個別学習をする、子ども自身と学ぶ内容を関連づける、選択させる、プロジェクトを実行する、感情を表す機会をつくる、自尊感情を高めるための活動をする、日記を書く、目標を設定する
⑧博物的知能	自然散策をする、教室の外に目を向ける、植物の世話をする、クラスでペットを飼う、自然に関するビデオや映画を見る、望遠鏡や顕微鏡など自然を観察する道具を使う、百葉箱を使って観察をする、環境学習をする

表4 8つの知能をもとに引き出される6つの人間性特徴

主要な人間性の特徴	関連する多重知能
マインドフルネス	言語的知能、論理・数学的知能、視覚・空間的知能、音楽的知能、対人的知能、内省的知能、博物的知能
好奇心	論理・数学的知能、視覚・空間的知能、音楽的知能、内省的知能、博物的知能
勇気	身体運動的知能、対人的知能、内省的知能
レジリエンス	身体運動的知能、対人的知能、内省的知能
倫理	対人的知能、内省的知能、博物的知能
リーダーシップ	論理・数学的知能、対人的知能、内省的知能

10) 二五 (2016) p.34

表4で、人間性特徴の観点から見ると、「マインドフルネス」が「身体運動的知能」以外の多重知能と関連している点が浮き彫りになる。ファデル, C.・ピアリック, M. 他 (2016) は「マインドフルネス」を「一刻一刻、展開していく体験に対して、今この瞬間に、判断や評価をしないで、意図的に注意を向けることにより生じる気づき」と定義しているが、この人間性は様々な多重知能を統合した人間性特徴である。永江 (2008) は学習指導要領における「生きる力」を多重知能理論から見ると、「知性的能力」と「情意的・社会的能力」の2つに多重知能のそれぞれが関わっていると主張するが、「マインドフルネス」とは知性と情意、社会性の育成から身につける「生きる力」であることがわかる。また、「レジリエンス」や「リーダーシップ」などの人間性特徴に、一見無関係に思える「内省的知能」や「論理・数学的知能」が関連している点も興味深い。

そして、多重知能の観点から興味深いのは、「対人的知能」や「内省的知能」がほぼあらゆる人間性特徴に関わっており、それらの知能の育成を前提にした教育活動を実施することであらゆる人間性特徴の育成が望める点である。

以上のような視点から教育活動を実施する上でまず問題となるのは、「どのようにして Content や Activity を準備するか」という点であろう。筆者はその方法の1つが外国語教授法の1つである CLIL だと主張する。池田 (2013) は、「CLIL では内容と言語だけでなく、思考と他者との学びも意識的に統合される」と CLIL の 4C について言及するが、思考と他者との学びがまさに「対人的知能」と「内省的知能」の学びである。加えて、外国語を通じた「協同活動を重視する」といった CLIL の特徴こそが、まさにそれに当てはまるであろう。

### 3.3 人間性教育の可能性と課題

従来の教育、特に学校教育では、教える内容として教科（専門科目）があり、教科ごとの目標があり、それらは知識、技能の習得が中心であった。しかしながら、教育成果の可視化が強調され始める時代が到来するにつれて、生徒に「何を教えるか」ではなく、生徒が「何ができるようになったか」といった点に重きを置くようになり、「何を身につけるか」を明確にする教育のあり方が重要になってきた。問題は、その可視化の中に「人間性」という要素が入ってきたことである。「人間性」とは何かという問いはもちろん、どんな教育をすれば身につくのか、それをどのように評価するのか等、今後生じるであろう問題は尽きない。

しかしながら、関連する多重知能、それぞれの知能を身につけるための教育、そしてそこから得られる人間性的特徴を組み合わせるにより、新しい教育目標、教育内容や言語活動を含めた授業実践の改革などが可能になるであろう。

特に、英語を始めとした外国語教育を単なるコミュニケーションの手段としての教育だけではなく、その教育独自の人間性を高める教育としてとらえることもできるであろう。教育のパラダイムシフトが起こりつつあるまさに今こそ、教育と人との繋がりが問われているのである。

## 4. 終わりに

本論文では、英語教育と人間性教育の関わりについて議論した。第1章においては、人間性

教育とは何かについてその定義と教育の目的について説明した。ファデル, C・ビアリック, M. 他 (2016) は人間性教育 (character education) を「豊かな人生と社会の繁栄のために賢明な選択ができる徳 (資質) や価値観 (信念と理念)、そして能力を身につけさせ、伸ばすことである。」と定義し、3つの目的をあげた。また、「マインドフルネス」、「好奇心」、「勇気」、「レジリエンス」、「倫理」、「リーダーシップ」等の6つの人間性特徴をあげ、関連する概念を紹介した。

第2章では、平成29年度告示の新学習指導要領における「学びに向かう力、人間性等」の扱いから、「学力」としての人間性等とは何かを議論するとともに、実際に指導する「内容」が明らかではない現状をあげた。また、CEFRにおける人間性とは「寛容で、多様性を尊重する」人間性であり、それを身につけることが外国語教育の目的であることに言及した。

第3章ではガードナー (2003) の多重知能理論を紹介するとともに、多重知能育成から引きだされる人間性特徴について説明した。加えて、二五 (2016) における多重知能理論を利用した英語 CLIL の実践例を紹介し、多重知能と人間性特徴の対応表を提示し (表4)、CLIL による人間性教育の可能性について言及するとともに、今後の人間性教育に関する問題とその可能性を論じた。

「英語教育」ということばを単なる言語の習得であるという概念から、英語教育を通じた人間性の習得という概念にシフトする時代がやってきた今、ますます「英語教育」にかかる期待は大きくなるに違いない。今後の教育実践研究が待たれるところである。

## 5. 参考文献

- ・アームストロング (2000) *Multiple Intelligences in the classroom*. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development. 吉田新一郎訳 (2000) 『「マルチ能力」が育む子どもの生きる力』小学館
- ・池田真 (2013) 「CLIL の原理と指導法」、『英語教育』6月号、大修館書店、pp.13-15
- ・和泉伸一 (2016) 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』アルク
- ・奥羽充規 (2018) 「CLIL: 多重知能理論と実践のための基礎知識」、『四天王大学紀要』第66号、pp.105-117
- ・ガードナー, H. (1993). *Multiple Intelligences: The theory in practice*. New York: Basic Books. 黒上晴夫監訳 (2003). 『多元的知能の世界— MI 理論の活用と可能性—』三晃書房.
- ・ガードナー, H. (1999). *Intelligences Reframed: Multiple Intelligences for the 21<sup>st</sup> century*. New York: Basic Books. 松村暢隆訳 (2001). 『MI: 個性を生かす多重知能の理論』新曜社
- ・ガードナー, H. (2006). *Five Minds for the Future*. Boston, MA: Harvard Business School Press. 中瀬秀樹訳 (2008) 『知的な未来をつくる「5つの心」』ランダムハウス講談社
- ・清田洋一 (2010) 「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」、『リメディアル教育研究』Vol.5, no.1, 37-43
- ・永江誠司 (2008) 『教育と脳 多重知能を活かす教育心理学』北大路書房
- ・二五義博 (2016) 『8つの知能を活かした教科横断的な英語指導法』溪水社
- ・二五義博 (2018) 「小学校英語は「内容」と「言語」の二刀流で学ぼう！— CLIL の思考を重視した教科

横断的指導の体験を通して―」全国英語教育学会・小学校英語教育学会 第3回英語教育セミナー資料

- ・ 拝田清（2017）「上に〈政策〉あれば下に〈対策〉あり!？」、『英語教育』4月号、大修館、pp.35-37
- ・ 本多敏幸（2018）『中学校新学習指導要領 英語の授業づくり』明治図書
- ・ ファデル, C.・ピアリック, M.・トリリング, B.（2016）『21世紀の学習者と教育の4つの次元』岸学監訳、北大路書房
- ・ 牧野真貴（2013）「英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり」、『リメディアル教育研究』Vol.8, no.1, 172-180
- ・ 松沢伸二・三浦孝・峯島道夫「新学習指導要領の「学びに向かう力、人間性等」を英語教育はどう構想すべきか」、『英語教育』9月号、大修館、pp.34-39
- ・ 村野井仁（2018）『小学校英語教育の基礎知識』大修館書店
- ・ 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』
- ・ Trilling, B., & Fadel, C. (2009). *21st Century Skills*. San Francisco, CA: Wiley and Sons.

